

世界は何を食べているか——第三世界の主食

特集にあたって

昨年来、「食糧危機」がグローバル化時代の新たな問題としてクローズアップされるようになった。不足するともっとも困るのは「主食」の材料であろうが、発展途上国の「主食」は食材の点でも、また調理法や食べ方についても、いまだに多様である。加えて原料の調達方法にもその国の自然環境のみならず、経済や政治体制が反映する。そのため今時の食糧危機でも、騒動に巻き込まれた国があれば、危機などどこ吹く風の国もあった。ところが私たちはご飯やパン、パスタ・麺など、普段口にするもの以外の「主食」について、なかなかイメージすることができない。そこで本特集では、世界の人口の大半を占める途上国の人たちの台所を覗いてみることにした。

●食糧危機到来

食糧危機は実に唐突にやってきた。昨年一〜三月時点では、「食糧危機」なる語が新聞記事の見出しに踊ることはなかった。ところが四月に入りエジプトやハイチで食糧暴動が起きると、堰を切ったような報道が始まる。ソマリアでは暴動で死者が出た。

フィリピンでは都市貧困層が安いコメ探しに奔走している。ハイチでは泥を混ぜたクッキーで飢えをしのぐ人がいる。「世界中」から食糧危機が報告されたのである。

国際社会の反応は素早かった。国連は五月にグローバル食糧危機タスクフォースを立ち上げた。六月の国際食料サミットはもちろん、五月のアフリカ開発会議、七月の洞爺湖サミットのいずれにおいても食糧問題が主要議題となった。この間に具体的な支援も動きだし、世銀が一二億ドルの食糧危機対応資金援助を発表した。

●食糧危機のグローバル化

今回の「食糧危機」は、国際価格の急騰が引き金となった。コメ、小麦、飼料用トウモロコシなど主要穀物の国際価格が、二〇〇六年末から二〇〇七年初頭の数カ月で突如二〜三倍に跳ね上がったのだ。価格高騰の原因について一般に言われていることは、①主要な生産輸出国での不作、②バイオエタノール原料向けの競合、③主要輸出国の禁輸措置、④投機マネーの流入、などである。主要穀物が国際的に取引

重富真一・児玉由佳・清水達也

され、また投機の対象にもなった現代世界では、一部の国、とりわけ主要な輸出国の出来事が、たちまち世界中に影響を及ぼす。かつての食糧危機は干ばつや紛争などが起きた地域に限られていたが、いまやそれもグローバル化したというのである。

●一様ではない主食のとりかた

しかしコメ、小麦、トウモロコシは確かに世界の主要な主食原料ではあるけれども、皆がみなそれらを食べているわけではなく、また食べ方も同じではない。そして皆が輸入に頼っているわけでもない。たとえばエチオピアの主食インジェラは、テフというエチオピア以外でほとんど栽培されない穀物を原料とする。ペルーでもアンデス地域の人々はジャガイモを主食のひとつとしてよく食べる。たとえ主要穀物を主食としているところでも、国際貿易からほとんど切り離されているところでは比較的平穏であった。そもそもこの食糧危機騒動の最中に、日本のお米の値段は下落したぐらいである。逆にコメの最大の輸出国タイでは国内米価も二倍になった。



食あるところに笑顔あり。タイ東北部の村にて(2005年11月14日、清水達也撮影)

食糧危機がグローバルな性格を持つようになったのは確かであるが、その現れ方はその国の食文化や食糧供給のあり方に随分と左右される。そこで本特集では、①何を主食に食べているのか、②どのように(どのような調理方法や形態で)食べているのか、③その材料をどうやって調達しているのか、という観点から各執筆者がフィールドとしている国の様子を描いてもらった。③は、食糧危機の影響とその原因を推し量るうえでも大切であろう。

●各大陸の「主食」

私たち日本人の「主食」イメージには、コメの特性が強く反映している。コメは味が淡泊だからおかずが必要で、逆にどのようなおかずにも合う。だからおかずが何であつても、コメは主食の座を

決して降りないのである。しかし世界を見れば、食に主/副の区別がそれほど明確ではないところも多い。アルゼンチンではパンは肉などの主菜に「添えられる」ものでしかない。それぞれの地域で食のあり方が違っているのだから、「主食」の定義も意味づけも、そしてそれへの思い入れも違っているだろう。

またコメは種子のまま煮たり蒸したりすれば食べられる

ので、調理方法が比較的画一的である。これが私たちの主食イメージを単調にしているもうひとつの理由かもしれない。しかし同じアジアでも北に進めば小麦原料の主食エリアがあり、そこでは小麦粉から餅や麺、餃子、ナーンなど、様々な形態の「主食」が現れる。アジアからちよつと南下してオセアニアにはいると、今度はイモ類が先住民の主食である。

アジアから西に進んで中東に入れば、小麦の存在感はさらに強くなる。イラクあたりまではコメがまだまだ重要な地位を占めているが、シリアに来ると主食はなんと言つてもパンである。そのパンは円盤状で大きく、西欧のそれよりはるかに存在感がある。中東は東西文明の交差点にふさわしい主食の分布を示しているようだ。

アフリカに入ると主食の様相はまた違ってくる。この大陸の自然環境は、砂漠、サバンナ、熱帯雨林、温暖湿润気候さらには地中海性気候と多様であり、人々の食生活もそれにあわせて多様である。主な主食としては、ヤムイモ、キャッサバなどを中心とした根菜類、雑穀やトウモロコシなどの穀類、そして料理用バナナなどがある。これらの主食作物は、雑穀類を除くとアフリカ原産のものは少ない。アフリカとアジア、ラテンアメリカとの長い交流の歴史を感じさせる。

海を渡つてラテンアメリカに入ろう。もともと人々は、この地域原産の農産物を主

に食べていた。メキシコ・中米はトウモロコシとマメ、アンデス地域はジャガイモやキヌア(アカザ科の雑穀)、アマゾン地域はキャッサバ(マンジオカ)などである。一五世紀末にヨーロッパ人が到着してからは、小麦とコメが加わった。ヨーロッパからの植民者、アフリカからの黒人奴隷、アジアからの移民がそれぞれ持ち込んだ食文化の中で、現在はこれらの農産物が幅広く食されている。

●のど元過ぎた食糧危機

昨年後半以降は、穀物価格も低下傾向に転じ、あれほど大騒ぎした食糧危機の話もほとんど出なくなった。しかし危機がグローバルに伝播する構造は何一つ変わっていないから、今時の出来事を教訓として何らかの準備が必要だろう。本特集で紹介された国の中には、政府が主食価格の安定のため相当な補助金を出しているところがあった。また国内生産と消費がほぼ釣り合っているため、今時の危機の影響が軽微なところもあった。危機の最中には国際的な食糧備蓄などが提案されていたが、一つの方法だけで危機に備えるのではなく、こうした途上国政府の食糧政策や食糧事情を検討したうえで、多様な対応策を考えておくべきではなからうか。

(しげとみ しんいち、こだま ゆか、しみず たつや/アジア経済研究所地域研究センター)